

# 森川誠一郎「新訳 空蟬」に寄せて

August 1, 2014 / text : 藤田幸也(Kαin)

森川誠一郎の声を初めて聴いたのは、確か1986年か1987年頃のことだと記憶している。それは、まるで言葉以前の叫びとでもいうべきもので、プリミティブな感情を剥き出しのままぶつけられたような衝撃だった。当時、日本のアンダーグラウンドなロック、インディーズのレーベルやアーティストというモノに興味を持ち始めたばかりの自分が最初に魅せられてしまったバンドのひとつがZ.O.Aだった。

その10年後、1996年には自分自身もインディーズレーベルの主宰者となり、まさか2014年の現在でも活動を続けることになるとは想像もつかなかったが…。余談だがそういえば後年、後に自分がProduceすることになるDir en grey (当時の表記)を初めて見た時にも、技術や方法論を超えた何か、言葉以前の叫びとか原始的な表現を根底に感じたような気がして、自分が好きになる表現の手段には決して表面的ではない何か共通するモノがあるのかもと感じたことを思い出す。

Z.O.A時代から作品を発表する度に変化進化深化を繰り返し、やがてはロックなのか、そうでないのかという境界さえも関係のない処にまで森川誠一郎は辿り着いてしまった。個人的にはそう感じてさえいた。

2000年に「仮想の人」が発売される頃までには既に発売される作品はライブ録音されその時々「一瞬」を作品に封じ込めることに主眼を置いているかのような方法論が徐々に主になりつつあったし、幸いなことにその時期に共演させていただいたライブでも、当時の自分には完全には理解出来ないまでも、Z.O.Aが、そして森川誠一郎が、行くところまで行ってしまうのではないかとロックとか音楽のフィールドさえも逸脱して違う世界へ表現の場を求めてしまうのではないかと、遠く離れてしまうことに怯えるようなファン心理と同時に、歪んだギターや攻撃的なシャウトという直接的な方法論さえも徐々に変化させ、音楽的には明らかに80年代とは違うモノに進化しているはずのZ.O.Aと森川誠一郎が、ある意味、回帰を果たしつつあるようにも感じられ、「仮想の人」のアートワークが80年代後期のV.A「TRANS CRAZE」を連想させたのにも理由があるかもしれない)行くところまで行き着き、そしてまた帰るべきところへ回帰する魂が、まるで「空」に還る天使のようについにその羽根を手にしつつあるのでは、とさえ感じとることができた。

だからその後、Z.O.Aが長らく作品を発表しなくなってしまったこともこの2002年にオリジナル盤が発売された森川誠一郎初のソロ作品「空蟬」が発売されたときも、自分は抵抗なく受け入れることができたし、いちファンとしてはそれはそれはとても寂しいことでもあったけれど、この後、彼が10年間に渡って公式な作品を発表しなくなることも、予感していたとまでは言わないまでも、自分には納得出来る部分があったのだ。森川誠一郎は行ってしまったのだと…。

それから、10年の歳月を経て「血と雫」として森川誠一郎が再び動き始めた。10年以上ぶりに見た彼は現在も当時と変わらず色濃い影を纏い、闇の中にだけ見える羽根を携えているかのようなようだった。

そして今回、12年ぶりに森川誠一郎初のソロ作品「空蟬」が再発される。闇の中でその言霊は粒子を震わせてこの胸にまで刺さる。混じり気のない表現衝動だけが変わることなく、むしろかつてよりも照準が絞られ研ぎ澄まされている。どこかに「土」を感じるのはブルースの匂いなのか、メロディらしいメロディなど持たない朗読でありながらその声は紛れも無くロックを感じさせる歌唱でも在るのだ。抑揚はビートを感じさせ、ビートは鼓動であり、まさに生命の鼓動、リズムが脈打つ様が刻み込まれている。リズムとは言い換えるとすれば此处では「間」であり、その「間」こそがボーカリスト、あるいは表現者としての彼を唯一無二の存在たらしめている大きな要素だと自分は考えている。この新訳版とでも言うべき2014年版の「空蟬」ではかつて発売されたオリジナル盤よりもその「間」の構築に重きを置かれているようにも、自分には感じられた。

「仮想の人」以降の「空蟬」そして「血と雫」一連の作品へと連なる秀逸なアートワークにより想起させられている部分も多いと思うのだが、個人的にはこの「空蟬」という作品には、Z.O.A～血と雫へと繋がるミッシングリンクをも内包し、確かにそれが此处には在るという気さえしている。この作品が、運命のいたずらとも言うべきこのタイミングで新たな姿を得て、2014年の現在に我々が手にすることが出来るとは実に奇妙でありながら必然とも感じられ、非常に興味深い。

想えば、あれから、長い長い時間を経て、それでもなお僕にとって森川誠一郎の「声」は、いつだって光であり、痛みだ。